

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 8 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02439

研究課題名(和文) 美学の可能性 美学イデオロギー批判を超えて

研究課題名(英文) Possibility of Aesthetics: Beyond the Critique of Aesthetic Ideology

研究代表者

大河内 昌 (OKOCHI, Sho)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60194114

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代化の原理としての「美学」の問題を、18世紀～ロマン主義時代のイギリス思想・文学を研究対象として分析した。おもにあつかったのは、シャフツベリー伯、デイヴィッド・ヒューム、エドモンド・バークとロマン主義詩人ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コールリッジである。本研究の特徴は修辭的な言語が内包する複雑で隠されたイデオロギー的な含意を発見するために、文学的な精読の技法を文学テキストだけでなく理論的なテキストにも適用したことである。それによって、この時代の文学的・理論的テキストの言語がもつイデオロギー的な機能つまり、美学イデオロギーの本質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学、思想史、経済学説史、政治学といった人文学・社会科学の分野における研究は、それぞれの分野で方法論が洗練され、ますます専門的なものになっている。それは、学問の深化・高度化という意味で必然かつ自然なことであるが、結果として、それぞれの分野が蛸壺化し、複雑化する社会を総合的に俯瞰する視点の欠如をもたらしている。本研究は、学問の専門化の時代において、あらためて人文学・社会科学の異なる分野間の相互対話を促進する学術的言説の可能性を切り拓くという意味で、大きな学術的・社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to elucidate the problem of “aesthetics” as a principle of modernization, focusing on eighteenth-century and romantic British thought and literature. The focus is laid on, in particular, Shaftesbury, David Hume, Edmund Burke, and romantic writers like William Wordsworth and Samuel Taylor Coleridge. The strong point of this study is that it applies the method of “close reading” to not only literary but to theoretical texts, in order to analyze the ideological implications hidden in rhetorical language. That makes it possible to elucidate the real nature of ideological function of rhetorical language--that is, aesthetic ideology--in literary and theoretical texts of the age.

研究分野：人文学

キーワード：美学 イデオロギー 小説の勃興 政治的保守主義 趣味 精読

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である大河内は、本研究を開始する以前には、18世紀イギリス文学・思想、ロマン主義文学の研究をおこなってきた。科学研究費助成金としては、これまで「18世紀イギリスにおける美学イデオロギーの研究」(基盤研究(C)、平成18~20年度)、「感傷主義の射程」(基盤研究(C)、平成22~24年度)、「デイヴィッド・ヒュームと18世紀英文学」(基盤研究(C)、平成25~27年度)の助成を受け、18~19世紀イギリスにおける文学、美学、政治経済学の関係を調査してきた。美学というキーワードを軸に18~19世紀イギリスにおける思想と文学を比較研究しようとする本研究は、これまでのイギリス文学・思想に関する研究成果をさらに深化・発展させるものである。

2. 研究の目的

本研究は1980年代以降の美学イデオロギー批判を理論的・方法論的な前提とした。1980年代以降の時期に、マルクス主義、ポスト構造主義、社会学の分野において美学批判が展開された。それらの批判が標的としたのは美学的判断の前提となる「無関心」という概念である。美学的判断はあらゆる党派的な利害から離れた公平無私という意味での「無関心」なものであるとされてきた。しかし、現代批評は「無関心」の背後にあるさまざまなイデオロギー的な利害関係を暴露し、美学と美学的価値判断の信憑性を大いに下落させた。とくにマルクス主義批評は「無関心」という美学的理想はブルジョア・イデオロギーにほかならないということを執拗なまでに主張した。ジャック・デリダやポール・ド・マンといったポスト構造主義者たちは、有機体論に代表される美学的な調和の理想の背後に、ファシズムにもつながりかねない危険な政治学の兆候をみている。現代においては「美学的価値」を無邪気に振り回すことはもはや不可能になっている。しかし、美学イデオロギー批判によって美学の問題に片がついたわけではけっしてない。そもそも、美学的判断は「強制なき意見の一致」という普遍性の理想をもっている。これは近代市民社会の合意形成の原理であり、また個別的部分が有機的な全体を形成する芸術作品の理想は近代的市民社会そのものの存立可能性を示唆している。美学の問題はそもそも道德の問題と密接に結びついている。個別的な市民に可能なかぎりの自由を与えようとするリベラルな市民社会がいかにして混乱と無秩序に陥らずにすむのかという問題 現代のわれわれが直面している問題は、美学の問題と直結しているのである。近代社会は美学的な問題に、依然としてつき纏われているのである。換言するなら、美学は問題を解決するための規準ではなく、それ自体が問題なのである。本研究は、美学イデオロギー批判の後で、美学をどう再評価するかという問題に取り組んだ。「美学」という言葉をつくったのはドイツの哲学者アレクザンダー・バウムガルテンであり、それを大きく展開したのがカントである。だが、そうしたドイツにおける美学の進展に先立って、イギリスにおいて幅広い美学研究が存在していた。従来、18世紀のイギリス美学は本格的な美学の「前史」という位置づけがなされることが多かった。しかし、18世紀イギリスの美学は、美学イデオロギー批判の後に美学の問題を再考するのに好都合な特徴をいくつかもっている。18世紀のイギリスでは、美学は道德哲学の一部門として生まれた。道德哲学とは、現在で言う法学、経済学、倫理学、歴史学、文芸批評などを包括的にあつかう総合的な学問であり、ケイムズ、ヒューム、アダム・スミス、バークといったこの時期の代表的な美学理論家は、政治学や経済学と明白に結びついたかたちで美学理論を展開していった。本研究は、これらの作家の美学テキストを分析することによって、美学が誕生の時点からある政治的な目的をもっていたことを解明することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の特徴は、美学理論が内包するイデオロギーをあぶり出すために、「精読」という方法を徹底して用いたことである。言うまでもなく、イデオロギーが構築する世界観は単純なものでもありえるし、複雑なものでもありえる。単純なイデオロギーは多くのことを説明できないがゆえに、大きな力をもつことはない。強力な説明力をもつイデオロギーは複雑かつ精緻なものであり、それゆえその媒体となる言語テキストもまた必然的に修辭的で複雑なものとなる。シャフツベリーからコールリッジにいたるイギリスの文人たちの言説は、市民社会に関する強力なイデオロギーを作り出した。だが、強力なイデオロギーの媒体となる言語テキストの複雑な修辭的構造は、テキストの表層的なメッセージを裏切るような「二次的メッセージ」あるいは「潜在的な陳述」をふくんでいる。精緻なイデオロギーを構築するテキストは、それゆえ、「精読」を要求する。本書がこころみるのは、イデオロギー的なテキストを精読することによって、それらのテキストがもつ表面的な主張だけでなく、それらの修辭的な構造が発する潜在的なメッセージを掘り起こすことである。なぜなら、表層的な陳述と潜在的な陳述のあいだの葛藤と矛盾の分析をとおしてのみ、テキストの中に痕跡として存在している歴史的・政治的な問題があきらかになるからである。テキストが内包する異なったレベルのメッセージが生み出す葛藤から、われわれは言語テキストの力学がもつ複雑な裏に分け入ることが可能となる。そうした力学の中に、物質的な政治と歴史の力の痕跡を見出すことができるのである。こうした精読の技法は、近年の理論的文学研究によって一層研ぎすまされたものになっている。本研究は、文学的な精読の技法によって思想史を読みなおすこころみであるが、同時に、従来は文学研究の対象とは考えられてこなかったテキストに精読の技法を適用することによって、文学研究の領域を広げようというこころみでもある。

4. 研究成果

(1) 本研究の第一段階では、政治的保守主義の古典と見なされているエドモンド・バークの『フランス革命の省察』の政治的な議論に混入している美学的言説を分析した。このテキストにおけるバークの中心的な企画を端的に言うなら、政治の美学化である。そこで機能している修辭法に注目することによって、政治における美学の役割もしくは美学の政治利用という問題に光を当てた。この研究においては『フランス革命の省察』とそれに三十年ほど先立って書かれた『崇高と美の起源』を比較し、この二つのテキストの間に大きなパラダイムの変化があったことを確認し、さらに、バークの政治学の中に趣味判断の基盤が個人から国家や共同体といった集団的なものへと移行する転換点があることを確認した。バークはもともと、美学的な反応の基盤を人間の個人的な身体に求めていた。彼によれば、美は快という感情に、崇高は苦痛という感情に、それぞれ起源をもつ。そして、苦痛から逆説的に生まれるよろこびである崇高を労働と結びつけていた。崇高の原理はあきらかに中産階級の労働倫理と結びついていた。しかし、後年のフランス革命論の段階でバークは、集団としての国民がもつ想像的な身体概念を構想するにいたる。本研究は、この想像的身体が彼の政治的な保守主義の構築を可能としたことを解明した。

(2) 本研究の第二段階は、18世紀イギリスの美学・道徳哲学の中心概念である「趣味」(taste)の問題を分析した。この趣味という概念の起源となったのはシャフツベリーが彼の主著『人間、風習、意見、時代の諸特徴』で主張した「内的感覚」の概念である。彼は人間が美と徳を感じる力を身体的な感覚と類比的に考えたのである。だが、美や徳を感覚や感情の問題とすることは、新たな問題を生み出す。それは、感覚や情念といった不安定なものの上に、いかにして道徳を基礎づけるのかという問題である。シャフツベリー以降の思想家たちはその問題に取り組む必要

に迫られることになった。もともと古典的な徳の思想を支持していた貴族的な作家であるシャフツベリーが、中産階級のイデオロギーである道徳哲学の出発点となったことは歴史の皮肉であるが、十八世紀の道徳哲学者たちが、理性よりも情念や想像力を上位に置いたことには大きな理由がある。本研究全体があきらかにしたように、当時の社会理論においては、商業の発展は欲望や野心といった人間の情念によってうながされると考えられていた。商業を擁護することは情念や想像力を擁護することを意味した。ここでは、シャフツベリーの思想がどういったかたちで次世代の思想家たちに引き継がれたのかをバーナード・マンデヴィル、フランシス・ハチソン、ケイムズらの著作を取り上げて検討した。マンデヴィルはシャフツベリーの徳の思想を荒唐無稽な虚構として嘲笑した。それに対してハチソンは、人間は生まれもった「内的感覚」によって徳と美を感知し愛するというシャフツベリーの道徳哲学を擁護するために、人は感覚においても道徳においても美しいもの愛するように神に定められているという発想 神の摂理という切り札 の導入を迫られることになった。そして、ケイムズをはじめとする彼の追隨者たちもその路線にしたがった。本研究は、そうした経緯を思想的に跡づけた。

(3)本研究の第三段階では、『人間本性論』に含まれているヒュームの虚構理論を、リアリズム小説の勃興という同時代の文学史的現象と関連させて考察した。ヒュームの虚構論は一見矛盾に満ちているように見える。彼は、一方で現実と虚構は区別できると主張し、他方でそもそも現実には虚構からできていると主張するという、矛盾した主張をしている。だが、彼のテキストを精読するならば、これは近代的な商業社会に必要な心の構えであることが判明する。商品と貨幣あるいは紙幣と貨幣がめまぐるしく交換されるような世界、あるいは情報が氾濫し虚構と事実の区別が困難になるような世界で生き残るためには、人は虚構を虚構として認識し、そのある部分が無根拠なつくり話として退けながらも、べつな部分はあたかも事実であるように受け入れてふるまう柔軟な心的態度が必要になる。ヒュームの虚構論が説明するのはそうした心的態度の必要性なのだ。彼はそうした矛盾した心的態度がいかにして可能となるかを、認識論的に説明したのである。この時代に勃興したいわゆるリアリズム小説という文学ジャンルも、ヒュームと同様な虚構に対する態度を前提として成立したものであることも同時に論じた。

(4)本研究の第四段階では、ワーズワスの詩作品における崇高の問題を、浮浪者の表象という視点から考察した。ワーズワスの詩は乞食や行商人といった貧しい放浪者をしばしば崇高な対象として描く。近代的な市場経済の周縁で貧しい生活を強いられているこうした浮浪者たちは、ワーズワスの詩の中で崇高な対象に転化する。崇高な対象としての彼らは、克己の精神や労働倫理を教える道徳的なメッセージを発する。だが、ワーズワスにおける崇高はたんなるイデオロギー的な道具ではない。ワーズワスの崇高はあらゆる商品の価値の根源でありながら、市場経済のシステムの中で不可視になってしまう労働する人間の物質的な身体をあらわにすることで、読者に市場経済が内包する非人間的な側面を気づかせるのである。ワーズワスの詩は一方では現状容認的な政治的メッセージを発すると同時に、そうしたメッセージを脱構築するような側面をもつ。それは、表象不可能なものの表象という逆説的な構造をもつ崇高は、みずからのメッセージを脱構築してしまう構造をもっているからにほかならない。ここでは、ワーズワスの崇高の表現に注目することによって、彼の美学イデオロギーのあり方を分析した。

(5)本研究の最終段階では以上の研究を、研究代表者である大河内がこれまで科学研究費助成金を受けて遂行してきた関連研究と総合的に統合し、まとめ上げた包括的な成果を『美学イデオロ

ギー『商業社会における想像力』(名古屋大学出版会)というタイトルの学術図書のかたちで公表した。以下、本書の目次をあげる。

- 第 部 道徳哲学における美学
- 第一章 シャフツベリーにおける美学と批評
- 第二章 趣味の政治学 マンデヴィル、ハチソン、ケイムズ
- 第三章 ヒュームの趣味論
- 第四章 ヒュームの虚構論
- 第五章 ヒューム、スミスと市場の美学
- 第六章 パークの崇高な政治学 『崇高と美の起源』から『フランス革命の省察』へ
- 第七章 身体の「崇高な理論」 マルサスの『人口論』における反美学主義
- 第八章 市民社会と家庭 メアリー・ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』
- 第 部 文学における政治・法・商業
- 第九章 家庭小説の政治学 リチャードソンの『パミラ』
- 第十章 徳と法のあいだ リチャードソンの『クラリッサ』
- 第十一章 商業社会の英雄譚 『序曲』におけるワーズワスの記憶術
- 第十二章 ワーズワスと崇高
- 第十三章 メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』と言語的崇高
- 第十四章 コールリッジの『文学的自叙伝』 商業、文学、イデオロギー
- 第十五章 コールリッジの政治的象徴主義 『政治家必携』における修辞法とイデオロギー
- 第十六章 国家を美学化することということ コールリッジの後期作品における文化理論の形成

本書の企画とは長い十八世紀のイギリスの思想家・小説家・詩人たちのテキストを「美学」というキーワードを軸に読解することによって、この時代のイギリスの理論的・文学的な言説が取り組んでいたイデオロギー的な問題をあきらかにすることであった。長い十八世紀のイギリスの文人たちは、美や道徳の規準を理性で説明することを拒否し、それを「内的感覚」、「道徳感覚」、「趣味」といった想像力に属する能力によって説明しようとした。理性によって論証できない感性に関わる事象に関する意見の一致を説明することこそ美学の中心問題にほかならない。重要なのは、十八世紀イギリスで書かれたこれらの美学以前の美学の特徴は、政治的・経済的な問題とのつながりをけって隠していないことである。というよりもむしろ、この時代のイギリスの美学はあからさまに政治的な課題に対する応答として書かれていた。最近の美学イデオロギー批判は、無関心(没利害的)であることを標榜する美学理論が政治的利害と共犯関係にあったことを暴露しているが、十八世紀イギリスの美学においては、政治や経済とのつながりはスキャンダルでも何でもない公然たる事実でしかなかった。この美学的言説が取り組んだ課題は、市民たちが自分の利益を追求するような近代的な商業社会は、いかにして社会の秩序と調和を保つことができるのか、あるいは、いかにして市民たちの道徳的墮落を防ぐことができるのかという問題に回答することであった。ばらばらな部分がいかにして全体的調和を構成できるのかという問題こそ、美学の中心問題にほかならない。本学術図書は、美学の言説が文学や芸術のみならず、政治経済学や道徳哲学のテキストと複雑に絡みあうかたちで、近代市民社会のイデオロギーの中核的要素となった事情を解明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 第42号
2. 論文標題 美学史の中のマンデヴィル	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本ジョンソン協会年報	6. 最初と最後の頁 pp. 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 第68号
2. 論文標題 David Hume's Theory of Fiction	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 pp. 65-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大河内昌	4. 巻 66
2. 論文標題 趣味の政治学 十八世紀イギリスにおける美学の形成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6. 最初と最後の頁 221-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大河内昌
2. 発表標題 「『文学的自叙伝』と読者の問題」（シンポジウム「今、コウルリッジの『文学的自叙伝』をどう読むか 文学研究におけるその現代的意義」）
3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会第43回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大河内昌
2. 発表標題 デイヴィッド・ヒュームの虚構論
3. 学会等名 名古屋大学英文学会平成28年度サマーセミナー（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大河内昌	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 376
3. 書名 美学イデオロギー 商業社会における想像力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----